

震災支援「あの時」の体験熱弁

〈阪神から東北へ…〉シンポジウム開催

〈阪神から東北へ…KSCの震災ボランティア〉をテーマに、開校20周年の記念シンポジウムが10月9日、カレッジホールで開催されました。台風下、出足は鈍かったものの熱心な卒業生や在学生250人が入場。阪神大震災の体験談や東北支援報告、宮城の復興状況に聞き入っていました。記録ビデオ、消防音楽隊の演奏も好評でした。ロビーではパネル写真展や東北物産販売もあり、賑わいました。シンポジウムはグループ〈わ〉が春から取り組んできたもので、多くの方の協力で開催に漕ぎつけました。（広報・南形徹）



今井学長



今野三幸氏



胤艸武宏氏



佃孝司氏



増金スミ子氏



三品隆氏



小池裕氏

午後1時開会。今井鎮雄学長が「超高齢化社会を迎える日本では、人と人が互いに支え合う社会を築くために、カレッジ生が担う福祉ボランティアへの期待は高まっている」と挨拶したあと、仙台豊輪学園、女川町などからの祝電が披露されました。

名取市社協常務理事・今野三幸氏は、東日本大震災による名取市の被害と閑上地区の復興について語りました。次いで、阪神大震災の記録映像を上映。救援物資が山積みされたカレッジ、ごった返す温泉センター、芝生広場に並ぶ自衛隊のテントなど貴重な風景が映し出されました。

1期生の胤艸武宏氏は温泉センターでのボランティア体験を語り、福祉振興協会の佃孝司氏は、救援基地となった、しあわせの村の対応ぶりと、現在も継続している東北支援活動を紹介しました。

続いて、東北支援活動の記録ビデオを上映。田んぼの瓦礫作業、仮設の皆さんや子供たちとの交流風景、津波で壊滅した町や学校の惨状が次々と展開されるシーンに、会場からため息が漏れました。

東北支援チームに4回とも参加した増金スミ子さん（福12）が玉すだれの衣装で登場。子供たちや仮設の女性との触れ合いで感じた思い出を披露しました。

閑上小学校長の三品隆氏は、「支援と受援」の関係を説き、学力向上を図るため、女川で「向学館」という学習の場を作った経験を語りました。

ここで18期のG学習「笑い届け隊」8人がチンドン屋風の衣装姿で登場。珍妙なパフォーマンスに拍手と笑いが…。

KSCのボランティア活動は、外部からどう見られているのか。神戸市社協の小池裕氏は「グループ



〈わ〉は、ボランティアの総合病院。企画から記録、自主財源まで自己完結している素晴らしい組織だ」と講評。閉会の挨拶で、堺理事長が東北支援を今後も続けると力強く宣言しました。

最後に、神戸市消防音楽隊が特別出演。防災の話を交えて、名曲をメドレー演奏し、大きな拍手を浴びました。お別れに「花は咲く」「ふるさと」を客席と一緒に歌って、午後4時20分に散会しました。

活動振り返るパネル写真展

ホール入口付近では、阪神大震災や東北支援関係の写真約80枚と新聞号外をパネル20面に展示しました。生々しい報道写真もあり、入場者は当時を思い起こしながら「貴重な写真ばかりですね」と感慨深げに見入っていました。写真の一部は神戸新聞・読売新聞・神戸市消防局・振興協会、上野照男氏（福1）から提供を受けたものです。

20周年式典 台風余波で簡素に

グループ〈わ〉に感謝状

シルバーカレッジ開校20周年を祝う記念式典が10月9日10時からカレッジホールで行われました。台風24号の接近で「警報発令なら中止」とあって参加者の出足は伸びず、予定の7割、350人ほどにとどまりました。

午前10時、音文専攻生による校歌斉唱で開会。矢田一郎・神戸市長から「第二の人生をボランティアとして活動しているカレッジの皆さんはすばらしい」と励ましの言葉があり、今井学長が「卒業生は6,000人を超えた。この中からグループ〈わ〉が生まれたことに感謝したい」と挨拶。崎元祐治・市会副議長からは「阪神から東北に続く支援活動に敬意を表する」との祝辞がありました。

この後、「再び学んで他のために」の建学精神の実践に貢献しているとして、今井学長からグループ〈わ〉に感謝状が贈呈され、記念碑と記念植樹の紹介がありました。

第2部は、新野幸次郎・元神戸大学学長が「日本の再生を担うシルバー・エイジ」と題して講演。

「高齢社会がしあわせであるためには、〈漫然と生きている〉から〈目標を持って生きていく〉高齢者をふやすことが必要」と訴えかけました。

〈他の為に〉記念碑完成

式典に先立って、9時15分から記念碑の除幕式が予定されていましたが、台風のため中止。代わって学長室で記念品目録の贈呈式がありました。今井学長、矢田市長、カレッジ運営委員、記念事業実行委員ら25人が参列。学生代表の階戸宏幸氏（食18）から目録が今井学長に贈呈されました。内訳は記念碑・江戸彼岸桜苗木30本・植樹経費となっており、桜は12月末をめどにキャンパスと、神港園・リハ神戸など6施設に植えられる予定です。

記念碑は10月初め、玄関前に建立されましたが、除幕式は中止となりました。碑は今井学長の揮毫で〈再び学んで他の為に〉の校訓が刻まれた高さ80cm、幅150cmの御影石製です＝12面に写真。

寄付金は10月5日現在、●3,200口289万円が集まっており記念碑・植樹代のほか、図書の充実、パソコンソフトの購入に充てられる予定です。



好評…東北物産完売

笹かまぼこと牛タン佃煮を販売した東北物産は大好評。かまぼこは予約と当日売りを合わせ300個、佃煮も145個を完売しました（写真）。生ものとあって、当日限りの受け渡し制にしたため、多少混雑しましたが、昨年の東北報告会で「おいしい」と評判になり、昨年の倍近い注文がありました。このほか、シンポジウムの中で上映されたビデオ『震災ボランティア奮闘』（17分）を200円で頒布。石巻市雄勝



18期G学習メンバーのパフォーマンス

震災シンボ関係の写真は木村成男・中屋好生撮影

町の被災者が貝殻で作った携帯ストラップを、北村緑朗さん（国17）のグループが1個350円で販売しました。これらの純益約7万円は、昨年に引き続き女川・名取の子供たちへのXマスプレゼントに充てる予定です。振興協会も伊達の燻製や小物、アイスクリームを販売しました。

笹かまぼこは、東北支援を通じて知りあった女川町のメーカーの好意で販売しています。担当の芦田理事は「台風が来たらどうなるか、前夜は眠れなかったが、いやあ、よかったよかった」。

震災支援シンポを終えて

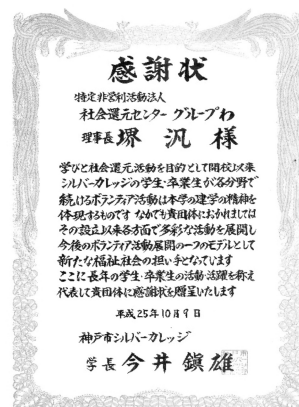
台風接近で参加者が少なかったのは残念でしたが、内容的には、ほぼプラン通り実施できました。会場アンケートでも「満足した」が7割近くありました。

このシンポジウムは今年2月、カレッジから要請され8か月かけて準備したものです。特に阪神大震災当時、カレッジ生はどういう状況だったか、誰が、どこで、どんなボランティアをしたのか。きちんとした記録・写真類が殆どなく、先輩諸氏を訪ねて歴史を掘り起こすことから始めねばなりませんでした。でも、そうした努力の結果が高い満足度につながったと自負しております。

アンケートには「再び学んで…の大切さ、ボランティアの重要性がわかった」「〈わ〉の支援活動に胸が

一杯になった」「消防隊の防災の話と演奏も良かった」という感想もありました。

堺理事長は閉会挨拶で東北への支援継続を力強く宣言しましたが、会場の皆さんからも「これからも頑張って」「東北ツアーの企画を」「誰もが参加できる支援プログラムを」など、前向きな声が寄せられています。「神戸モデル」と講師から称賛され、感謝状まで頂いたことを肝に銘じ、さらに1年がんばります。ご協力をお願いします。東北支援プロジェクト



大動員で式典・シンポ運営

20周年式典と震災シンポジウム、コンサートが続いたため、グループ〈わ〉は8日のリハーサルから10日まで、会場作り・受付・駐車場整理など大忙し。理事だけでは手が足りず理事OB、北区会、ぴかぴか隊などの協力で準備・運営に当たりました。

【震災シンポジウム運営】 ▼東北プロジェクトチーム＝堺・南形・芦田・海野・大澤・増金・橋野・波多野・片岡・内村・板谷・田路・古後▼わ本部＝小畑・井上・北浦・木田・井口・吉本・俵・山本・北村・西山・土井・小林・西田・長谷川・古川・江本▼協力者＝淡路・飯川・北山・吉武・道満・大垣・木村・中屋・伊谷・庄田・石谷・堺(寿)・黒野・平林・南形(公)・宮崎・18期G学習笑い届け隊

【10日のコンサート】ぴかぴか隊の協力で駐車場整理

学園祭で東北支援募金 グループ〈わ〉と学園祭実行委員会は10月12日、学園祭会場で東北支援活動などに充てる募金活動を実施。約4万円の協力が得られました。

サポート募金賛同者 (7月11日～10月11日)
住田暉江 (食3) 1千円、環境未来館有志3千円、植田収 (福7) 2千円、宮崎彌生 (福5) 1千円、千原美哉子 (福9) 5千円、山下博邦 (福17) 1万5千円、水上桂子 (音17) 5千円、環境未来館募金箱4千470円

お礼 震災支援シンポジウム、東北物産販売は、〈わ〉の会員や在学生の皆さまのご協力で、無事ゴールできました。ありがとうございました。

【シンポジウム6氏の発表内容】

●東日本大震災への対応と復興 (名取市社会福祉協議会・常務理事：今野三幸) 市内7か所に1,100戸の仮設住宅を建設。大きな課題は町の復興です。被害の大きかったのは、関上地区と下増田地区ですが、下増田は既に集団移転が決定。関上は行政と住民の考えが一致しておらず、協議を重ねて計画の変更を行っているところです。

●阪神大震災のボランティア体験 (福祉1期：嵐山武宏)

神戸の惨状を知り、使命感に動かされボランティアを希望。事務局で紹介された物資の仕分けと温泉の整理を担当した。仕分けで一番困ったことは古着の扱いでしたが、その時の経験から状況認識の大切さを学び、温泉開放では多くの方と接し、人間模様を見る機会を得ました。

●しあわせの村の震災活動 (福祉振興協会・企画広報係長：佃孝司) 阪神淡路大震災では村全体が救援基地。消防や自衛隊のテント村になり仮設住宅が建てられた。温泉の開放では13万人の利用者があった。東日本大震災では、いち早く募金で購入した物資を届けたほか、毎年、応援メッセージと共に支援隊を派遣している。今後も関係機関や〈わ〉と連携して東北支援を継続したい。

●第1～4次の支援活動で感じたこと (福祉11期：増金スミ子) 想像以上の悲惨な状況を目のあたりにして、改めて津波の恐ろしさを実感。「子どもたちに未来はあるのか」と思いましたが、回を重ねるごとに明るく元気になっていく姿を見て安堵しました。支援を通じて、人との繋がりがや素晴らしい数々の体験ができ、本当に嬉しい。東北は私にとって第二の故郷です。

●3・11これまでとこれから (名取市・関上小学校長：三品隆) 全国各地からの支援で、子どもたちは元気と勇気をもらったが、教育現場では支障をもたらすこともあった。支援に対する「受援」の力、即ち、コーディネートの重要性を実感しました。学力低下を防ぐため、女川では向学館という学習の場をつくり活用しています。今春から関上小に移り、学校再建に取り組んでいます。

●外からみたKSCのボランティア (神戸市社協・広報交流部長：小池裕) カレッジはボランティアの総合病院。どんな難しいニーズでも、創意工夫と協力で引き受け貰える安心感があります。東北支援の凄いところは、企画から受け入れ先の調整、自主財源の確保などすべて自己完結という点です。今後とも、神戸のボランティアリーダーとして、東北へ支援の輪を広げていきたい。【今井学長のメッセージは、「ぎゃらりー特別号」に掲載しています】